

こ ん と ん

園長 こうち たかし
敬 高地

8月に書いた『莊子』という本にあるお話の一つ。
『昔、混沌(こんとん)という王さまがいて、顔に目、鼻、口、耳の七つの穴がな
かった。北の王さまと南の王さまは、混沌のもてなしに感謝して、一日に一つ
ずつ混沌の顔に穴をあけてやった。すると、七日目に混沌は死んだ。』

「混沌」という言葉の語源だと思います。混沌、つまりごちゃごちゃの状態に
文字通り目鼻を付けるとごちゃごちゃさが無くなって秩序あるものになる。そ
れで混沌は死ぬ。混沌の混沌たる所以が無くなってしまう。「混沌とした状態
にも意味がある」という価値観なのだと思います。ごちゃごちゃよりもきちん
としている方がいいと私たちは無意識の内に思います。たとえば家の中がきち
んとしていないといけないという人がいて、逆に家の外がきちんとしていない
といけないと考える人もいますが、いずれにしても私たちは秩序の方が混沌
より価値があると考えているようです。でも、2300年も前の莊子が、それでい
いのかと問いかけています。

聖書の一番初めの創世記の初め、「初めに、神は天地を創造された。地は混沌
であって…」、ここから神さまは七日間で世界を造られたという話です。

「地は混沌」だったけれども神さまは光や天体、生物、最後に人間を造られ
ますが、これは混沌とした状態に秩序を付けられたと受け止められるところ
です。でも、本当にそうでしょうか。「人間は秩序ある状態しか認識できない」
と言われます。神さまは混沌とした状態に仕方なく秩序を付けられたと受け止
めることができないのか、と私は思っています。

混沌はよろしくない大人は考えますが、子どもたちはそんなことは全く
お構いなしです。子どもが大人のように整然としていたら、逆に気味が悪くな
いでしょうか。でも、「早く片付けなさい」という代わりに「早く散らかしな
さい」とはとても言えませんが。